

【 復活讃詞 第4調 】

しゆのおんなでしはふくかつのひかるおと
 主女弟子は復活の光るお音
 づれをてんしよりききうけて、
 天使聞き受
 げんそよりのていざいをふるいすて、しと
 原祖の定罪を振棄使徒
 にほこりていえり、しはほろぼさ
 誇り日死滅
 れ、ハリストスカみはふくかつして、せかいに
 神は復活して世界
 おおいなるあわれみをたまえり。
 大憐賜

【 列祖のアポリティキオン 第2調 】

ハリストスカみよ、なんぢはれっそをしんによりにてぎ
 神みよ、爾列祖信由義
 なるものとなし、かれらをもつてしよ
 者とな爲し、彼等以諸
 みんなりきょうかいをへいていしたたまえり。
 民教會聘定給
 せいなるものはこうえいにていわあ
 聖者光榮在祝
 う、けだしそのたねよりしゆくふくせられた
 蓋其種祝福



 る み は い で た あ り 、 こ れ た ね な く な ん ぢ
 果 出 是 種 爾
 を う み し も の な あ り 。 か れ ら の き と う
 生 者 彼 等 祈 禱
 に よ り て わ れ ら を す く い た ま あ え 。
 由 我 等 救 給

【 列祖のコンダキオン 第6調 】



 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今
 い つ も よ せ よ せ に 、 ア ミ ン。
 何 時 世 世
 み え に ふ く た る も の は て の し る し た る か た ち
 三 重 福 者 手 記 像
 を う や ま わ ず し て 、 し る さ れ ぬ し ん せ い に
 敬 記 神 性
 よ う ご せ ら れ て 、 ひ の げ き じ ょ う に え い を
 擁 護 火 劇 場 榮
 え た あ り 。 か れ ら は た え が た き ほ の お
 獲 彼 等 堪 難 焰
 の う ち に 立 ち て 、 か み を よ べ り 、 あ あ か ん
 中 立 た 神 を 呼 鳴 呼 寛
 ゆ う の し ゅ よ 、 い そ げ 、 じ れ ん な る に よ
 宥 主 急 慈 憐 因

りてすみやかにわれらをたすけたまえ、
速 我等 助 給

なんぢはほつするところよくせざるな あし。
爾 欲 所 能

司祭) (黙誦： 聖なる神、 聖者の中に息い、 セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
ヘルヴィムより讚榮せられ、 悉くの天軍より伏拝せられ、 萬物を無より有と
なし、 人を爾の像と肖とに依りて造り、 爾が諸の賜を以て之を飾り、
願う者に智慧と明悟とを與え、 罪を行なう者を棄てずして、 其救の爲に痛悔
を立て、 我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、 此の時に於ても、 爾が聖な
る祭壇の光榮の前に立ちて、 爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と
なしし主宰よ、 爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、 爾の仁慈を
以て我等に臨み、 我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、 我が靈と體と
を聖にし、 我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、 聖なる
生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、 爾は聖なり、 我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、 今も何時も世世
に、

アミン。

【 聖三祝文 】

せいなるかみ、 せいなるゆうき、 せいなる
聖 神 聖 勇 毅 聖

じょうせいのものよ、 われらをあわれめ
常 生 者 我 等 憐

よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれめよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれめよ。こうえいはちちとこせいしんにきす、いまもいつもよよに、アミン。せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれめよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれめよ。

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 提綱 (プロキメン) 諸祖の歌 第4調 】

司祭) ^{つつし} 慎 ^き みて聴くべし、^{しゅうじん} 衆 ^{へいあん} 人に平安、



なんぢのしんにも。
爾 神

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{しゅわ} プロキメン、^{せんぞ} 主我が先祖の神よ、^{かみ} ^{なんぢ} 爾は讃揚せられ、^{さんよう} ^{なんぢ} 爾の名は世々に^な ^{よよ} 讃美^{さんび} ^{さんえい} 讚榮せら

る、

しゅわがせんぞのかみよ、なんぢはさんようせ
主我先祖神 爾 讚揚
られ、なんぢのなはよよにさんびさんえいせ
爾 名 世 世 讚美 讚榮
らる。

誦經) ^{けだしなんぢ} 蓋 爾は凡そ我等に^{およ} ^{われら} 行いし^{おこな} 事に^{こと} 於て^{おいぎ} 義なり。

しゅわがせんぞのかみよ、なんぢはさんようせ
主我先祖神 爾 讚揚
られ、なんぢのなはよよにさんびさんえいせ
爾 名 世 世 讚美 讚榮
らる。

誦經) ^{しゅわ} 主我が先祖の神よ、^{せんぞ} ^{かみ} ^{なんぢ} 爾は讃揚せられ、

なんぢのなはよよにさんびさんえいせ らる。
爾 名 世 世 讚美 讚榮

【 使徒經 (アポストロス) 257 端 コロサイ書3章4節~11節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと} 聖使徒パヴェルが^{じん たつ}コロサイ人に^{しよ よみ}達する書の讀、

司祭) ^{つつし} 謹みて^き聴くべし、

誦經) ^{けいてい} 兄弟よ、^{なんぢら} 爾等の^{いのち}生命たる^{あらわ}ハリストスの^{とき}現れん時、^{なんぢら} 爾等も^{かれ}彼と^{とも}偕に^{こうえい}光榮の中に^{あらわ}現

^{ゆえ}れん。故に^{なんぢら} 爾等の^ち地に^あ在る^{したい}肢體を^{ころ}殺せ、^{すなわちいんこう} 即淫行、^{おかい} 汚穢、^{じゃし} 邪修、^{あくよく} 惡慾、^{およ} 及び^{たんらん}貪婪、

^{すなわちはいぐうぞうこれ} 即拜偶像是なり、^{これら} 此等の^{ため}爲に^{かみ}神の^{いかり}怒は^{さからい}悖逆の子に^{このぞ}臨む。^{なんぢら} 爾等も^{さき}曩に、^{かれら} 彼等の^{うち}中

に^お居りし^{とき}時、^{これ} 之を^{おこな}行えり。今は^{いま} 爾等も^{いかり}忿怒、^{いきどおり} 恚憾、^{うらみ} 怨恨、^{そしり} 謗讟、^{なんぢら} 爾等の^{くち}口より^{いだ}出

ず^は愧づべき^{ことば}言、^{いつさいこれ} 一切之を^さ去れ、^{たがい} 互に^{いつわり} 謊を^い言う^{なか}勿れ、^{けだしなんぢらふる} 蓋爾等^{ひと}舊き人^{そのおこない}と其^い行と

を^ぬ脱ぎて、^{あらた} 新なる^{ひと}人、^{すなわちかれ} 即彼を^{つく}造りし^{もの}者の^{かたち}像に^{したが} 循いて^{ちしき}知識の^{あらた}改めらるる^{もの}者を^き衣た

り。此には^{ここ} エルリン人^{じんおよ} 及び^{じん} イウデヤ人、^{かつれいおよ} 割禮及び^{むかつれい} 無割禮、^{ヴァルヴァロおよ} 夷狄^{どれいおよ} 及び^{およ} スキト、^{およ} 奴隸^{およ} 及び^{およ} 奴隸及

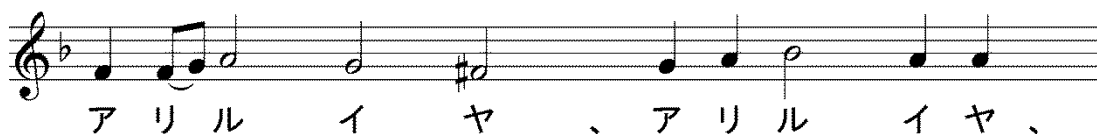
^{じしゅ} 及び^{もの} 自主の者なし、^{すなわち} 即^{いつさい} ハリストスは^{およ} 一切なり、^{いつさい} 及び^{うち} 一切の中に^あ在り。

司祭) ^{なんぢ} 爾に^{へいあん} 平安、

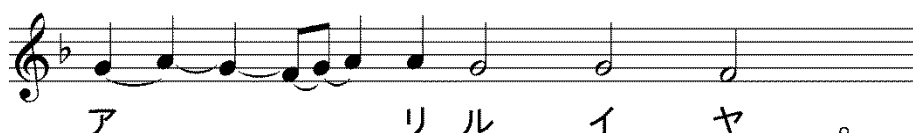
誦經) ^{なんぢ} 爾の^{しん} 神にも、^ア アリルイヤ、

【 諸祖のアリルイヤ 第4調 】

司祭) ^{えいち} 睿智、



誦經) ^{しさい} 司祭の中に^{うち}モイセイ^{およ} 及び^{かれ} アアロンあり、^な 彼の^よ 名を^{もの} 呼ぶ者の中に^{うち} サムイルあり、





誦經) 彼等主に呼びしに、主之に聴けり、



司祭) (黙誦: 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念

の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

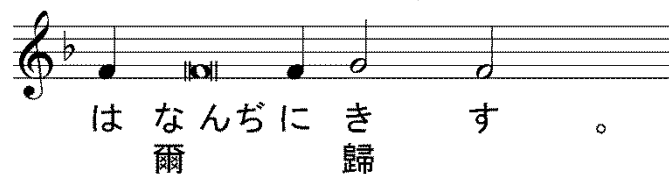
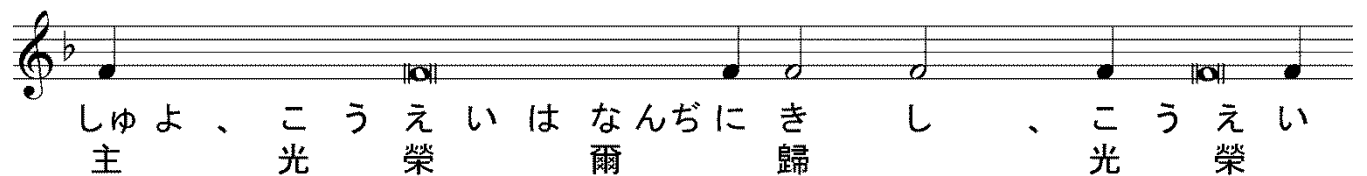
て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) ルカ福音書76端 14章16~24節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、

司祭) 主は左の 譬 を設けて曰えり、或 人 大 なる 晩 餐 を設けて、多 くの 者 を招きたり。晩

餐の時に及び、其 僕 を遣 して、招 かれたる 者 に謂えり、來 れ、蓋 一 切 已 に備われ

り。彼 等 皆 同 じく 辭 したり。第 一 の 者 曰 えり、我 田 地 を買 いたり、往 きて之 を見ん こと を

要 す、請 う、我 が 辭 するを 允 せ。他 の 者 曰 えり我 牛 五 耦 を買 いたり、是 を 試 みん 爲 に

往 く、請 う、我 が 辭 するを 允 せ。又 他 の 者 曰 えり、我 妻 を 娶 りたり、是 の 故 に 來 る 能 わず。

其 僕 歸 りて、之 を 主 に告 げたれば、家 主 怒 りて、其 僕 に謂 えり、速 に 邑 の 衢 と 巷

とに出 でて、 貧 乏、廢 疾、跛 者、瞽 者 を此 に引 き來 れ。僕 曰 えり、主 よ、爾 の 命 ぜ

し如 く 行 いたれども、尚 餘 れる 座 あり。主 は 僕 に謂 えり、道 路 及 び 藩 籬 の 間 に出 でて、

入 らん こと を説 得 して、我 が 家 に盈 たしめよ。蓋 我 爾 等 に語 ぐ、彼 の 招 かれたる 人 は、

一 も我 が 晩 餐 を嘗 めざらん。蓋 召 されたる 者 は 多 けれど、選 ばれたる 者 は 少 し。

しゆよ、こ う え い は なんぢに き 歸 し、こ う え い
主 光 榮 爾 歸 光 榮

は なんぢに き 歸 す。
爾 歸

※聖体礼儀3 (金ロイオアン) へ